

# 徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

175号

平成28.9.13

## とくしま随筆大賞

第17回

竹内晴美さん(徳島市)に輝く

準大賞 手塚雅夫さん(阿波市) 鴻野福恵さん(吉野川市)

応募 過去最高75編



竹内晴美さん

徳島ペンク

ラブ主催の第

17回とくしま

随筆大賞の最

終選考会が1

日、県立文学

書道館であり、今年の大賞に竹内晴美さん(68)≡徳島市名東町2丁目≡の「モッコウバラが咲いた」を選んだ。

「モッコウバラが咲いた」は、選考委員から「とても完成度が高く、心の琴線に響いてくる。心の底では認め合いながら、すれ違ってしまふ姉と弟。もどかしさや、奥底にある思いを丁寧に描き出した。わずかなつながりの中に垣間見える互いの心情をすくい上げ、心の移ろいを巧みに伝えていく」などと、高い評価を受けた。

準大賞に、今年は2作品が選ばれた。手塚雅夫さん(阿波市吉野町柿原)の「頭頂記」と、鴻野福恵さん(吉野川市鴨島町西麻植)の「我が人生に乾杯」。入選には、山形靖子さん(小松島市中田町)

## 前会長 山下博之さん死去



徳島ペンクラブ顧問で、海野十三の会会長の山下博之さん(徳島市川内町富吉)が2日、大動脈瘤解離のため自宅で死去した。享年84歳だった。

早稲田大学第一文学部卒業。徳島新聞社記者、県立高校長、文化の森の県立図書館初代館長、四国大学教授などを歴任。徳島ペンクラブでは、高校教師の頃から活動。2007年から6年間会長を務めた。

ライフワークとして、阿波人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」に登場する「阿波の十郎兵衛」や、徳島市出身で、SF作家として知られる海野十三を

研究。92年に発足した「海野十三の会」の会長として文学碑の建立、企画展など海野の再評価に尽力した。15年度の県文化賞のほか、これまで県文化協会出版文化賞、県知事表彰、地域文化功労者文部科学大臣表彰などを受けている。著書に「私本・阿波の十郎兵衛」「阿波十郎兵衛の娘・おつる」などがある。

の「仙人となった雪子先生」、坪井壽美代さん(阿南市富岡町)の「ミズと私」、崎本久枝さん(徳島市川内町)の「ハーベスト」の3編が入った。また、今回も若い方からの応募が多く、前回に続き奨励賞を設けた。その奨励賞には、藤井春樹さん(大学生、21歳)の「祖父のこと」が選ばれた。

## ●受賞の喜び●

この度は、とくしま随筆大賞に選んでいただき光栄です。今まで、仕事も趣味も「成し遂げた」という喜びもなく、ここまでできた私にとって、初めて成し遂げた実感が得られました。それも、あこがれと夢の対象であった、随筆大賞をいただけたことは、生涯で一番うれしい出来事です。ありがとうございます。  
(竹内 晴美)

今回は、これまでで最高の75編の応募があった。7月、全作品をペンクラブの副会長、理事ら6人が作者名を伏せて予備審査し、優秀作品11編を選出した。この11作品を、選考委員の依岡隆児・徳島大学総合科学部教授、撫養佳孝・徳島新聞生活文化部担当部長、竹内菊世・徳島ペンクラブ会長の3人が、それぞれ個別に審査し、1日、3人の合議で最終決定した。

各賞の授賞式は、11月6日(日)午前10時半から、徳島駅前阿波観光ホテルで、会員の懇親会を兼ねて行う。当日は随筆大賞選考の経過報告の後表彰を行い、続いて選考委員の講評、受賞者代表のあいさつ、大賞・準大賞作品の朗読、このあと懇親会に移行する。大賞、準大賞作品は、12月下旬発行予定の「徳島ペンクラブ選集」34号に、選考経過、3選考委員の選評と共に掲載する。

## 県民文化祭協賛イベント

### 講演と講談の2本立て

10月16日 県立文学書道館

SFの父 海野 十三

ペンクラブ主催の今年の県民文化祭協賛イベントは、既報のとおり、10月16日(日)午後、「徳島が生んだSFの父 海野十三(うんの・じゅうぞう)」をテーマに「県立文学書道館」で開催する。

徳島市出身の作家・海野(本名・佐野昌一)は、戦前から戦後にかけて活躍。科学者としての知識を生かした独創的なアイデアを盛り込んだ作品で、戦後、敗戦のショックが強く喪失感のあった多くの子供たちに夢を与えた。彼はさらに、世界的地球的な視野に立つて、SF小説という形を通して平和の尊さを訴え続けた。

イベントは、海野の作品に焦点を当てた講演と講談の2本立て。講演の演題は「海野十三研究最前線」。海野十三の会副会長で、北島創生ホール元館長の小西昌幸さんが、長年にわたる海野研究の果実を披露する。一方、講談は上方講談師、旭堂南湖(きよくどう・なんこ)さん(兵庫県宝塚市生まれ)で、2012年には、NHK「BS歴史館 永遠のヒーロー・真田幸村」に出演している。イベントでは、「蠅男」他、を語る。

入場無料。当日の開場は午後1時、開演1時半、終了は3時半を予定。(イベントの詳細は、同封チラシご参照)

## 「選集」34号の原稿募集中!

### 特集 「海野十三の世界」

ただ今、ペンクラブ選集パート34(12月末発行予定)の原稿を募集中です。特集、一般原稿のどちらか、もちろん両方も歓迎です。選集は、会員からの作品で成り立っています。応募要領を再掲します。奮ってご応募ください。

**特集** 徳島が生んだ「SFの父」と呼ばれる海野十三を多角的に顕彰します。海野はSF作家としてだけでなく、科学者、探偵作家、少年小説家、漫画家、翻訳家など多彩な顔を持っています。独創的なアイデアが盛り込まれた小説は、戦後、敗戦のショックに落ち込んだ子供たちに夢を与えてくれました。漫画家・手塚治虫ら、後に続く多くの作家たちに影響を与えたことも特筆されるでしょう。

皆さんの中には、若い頃彼の作品に夢中になった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。特集では、「海野十三の世界」と銘打って作品だけでなく、その人となりなど多面的に顕彰したいと思います。

●応募原稿 2000字または4000字。(6000字、8000字も可、写真、イラスト等入れる場合はその分、文章を短く)

【一般原稿】 会員からの要望もあり、今回から一部変更しました。随筆は従来どおり2ページ分、2000字。短歌、俳句等は2ページ分、15首(句)、詩、連句は従来どおり。

●掲載料 前号から一部変更になっています。一般作品は2ページ7000円、追加1ページ2000円。ただし、1ページだけの追加は誌面編集の関係上ご遠慮ください。2ページ追加で計4ページ、掲載料は11000円となります。特集も会員外の方に依頼の場合や、特例を除き、一般作品に準じます。掲載料は、翌年1月末に郵便口座引き落とし、または郵便為替で徴収します。

●原稿の締め切りと送付先 一般原稿は9月末、特集は10月20日  
〒770-8074 徳島市八万町下福万128-28 田上倉平宛 Eメール jonan@mc.pikarane.jp

※原稿のご送付に当たっては、安全のため必ず控えを保存しておいてください。

## 「選集」34号に前会長追悼コーナー

原稿募集

1面でもお知らせしましたように、徳島ペンクラブ前会長の山下博之さんが2日、死去されました。これを受け、9月の理事役員会で、12月末発行の「選集」34号に、追悼文コーナーを設け、弔意を表すことになりました。多数の会員の寄稿を期待しています。

追悼文は、原稿用紙2枚・800字程度でお願いします。締め切りは10月末とします。氏名は欄外にお書きください。Eメール送信も歓迎です。送り先は、一般原稿同様編集担当・田上まで。

## 雑感

今の小学生がどうか知らないが、私が小学生だった昭和三十年代後半、夏休みの宿題といえば、「夏休みの友」や「ドリル」などの学習系を除くと「読書感想文」「押し花」「昆虫採集」「写生」「工作」が定番中の定番であった。

この中で最も嫌だったのは「読書感想文」。友人からはよく「本を読むのが好きだから楽勝じゃん」とか「ついでに別のを書いといて」などと言われたが、とんでもない。読むことと内容を人に伝えることは別物、はつきり言っただけで、そんなことを言ってもスルーされるだけ。

特に、私の通っていた小学校は何を読んでもいい、というのではなく課題図書があった、これがだいたい伝記ものだから始末に負えない。

なんだよ伝記物って。小学生にエジソンだのリンカーンだの野口英世の一生なんか読ませて面白いのか？ まっとうな小学生なら江戸川乱歩の少

## 夏休みの宿題

年探偵団、コナンドイルのホームズ、モーリス・ルブランのルパンなどのシリーズもの、ハインラインやジュール・ヴェルヌのジュブナイルもとかじゃないのか？  
「どきどきわくわくさせられてホントに面白い」で十分ジャンナイカ。わざわざ人に感想を伝える必要がどこにあるのだ？ そのために呻吟するのは私にとって苦痛以外の何物でもなかった。

だから、私が本を読む唯一の基準は「面白いか否か」。偉人の生涯を知り、自分の人生に生かすとか、人生を豊かにするとかのために本があるわけじゃないと思っただけ。読書とは言ってみれば人生の

スパイスか。  
ところで、最近、「読書の腕前」という本を読む機会があった。共感できる部分はほんの少し。大半が年間三千冊もの本に接するという著者の読書歴に酔った自慢話に終始しているから驚いた。こんな読書人にはなりたくないなあ、というのが感想である。

(山口久雄)

千利休や与謝野晶子に会えるよ!

## さかい利晶の杜

芦屋では谷崎潤一郎記念館

ペンクラブ今年の文学旅行は、11月20日(日)千利休や与謝野晶子を生んだ大阪・堺市や、兵庫県芦屋市の谷崎潤一郎記念館などを訪ねる。

徳島駅ポツポツ街西側、四国大学交流プラザ前を午前8時、大型観光バスで出発。淡路島経由で堺市に入り、最初に、南宗寺(なんしゅうじ)を見学する。三好長慶が、非業の死を遂げた父・三好元長の菩提を弔うべく、大林宗套に開山を依頼して創建したといわれる。境内に、国の名勝に指定されている枯山水庭園がある。また、千利休が修行した縁の寺でもある。昼食は、「レストラン木曾路宿院」で和牛霜降肉のすきやき定食。この後、メーンの「さかい利晶(りしょう)の杜」を訪れる。千利休と与謝野晶子の生涯や功績を、パネルや映像を多用して紹介する新しいタイプの博物館で、茶の湯体験ができる。また、晶子による源氏物語朗読の録音が聞けるコーナーもある。昨年3月オープンしたばかり。

帰路、芦屋市の谷崎潤一郎記念館に立ち寄る。昭和の初期、谷崎が3年ほど芦屋に住み、名作「細雪」を書き上げた。この業績をたたえ、芦屋市が建設したもので、谷崎の遺品のほか「細雪」の自筆原稿や手紙、初版本などが展示されている。彼の愛用した座机や硯箱などを配した4畳半の書斎も再現。ちようど、今年が生誕130年にあたり、それを記念しての「谷崎の源氏物語」特別展が開催中で、これを鑑賞する。

徳島駅(出発地点)帰着は午後6時40分ころの予定。会費は10,000円(当日集金)。参加ご希望の方は、同封の参加申し込みはがきに所定の事項を書き込み、10月末日までに投函してください。先着40人。

この件のお問い合わせは、安曇統太さん(090-8692-9613)まで。

★蔭山美紗子さん

5月、県内文芸誌に寄稿した随筆や徳島新聞文



化面「阿波圏」に掲載した作品などを収録した初めての著書「合歓のはな」(B6判、263ページ写真)を自费出版した。この中には、04年第2回とくしま文学賞随筆部門 最優秀賞受賞の「父の心、私の心」など、文章で自分の生きざまを綴った感動の一編も収録されている。

★西池冬扇さん 7月、徳島新聞の「徳島俳壇」選者に就任した。これに伴い、2012年1月から続けてこられた徳島新聞ヤングカルチャー「季節のひとかけら」(とぎ)の撰者は降りた。現在、俳誌「ひまわり」主宰。日本俳人クラブ会長、俳人協会評議員。

★三好昭一郎さん 徳島で晩年を過ごしたポルトガルの文人モラエス(1854-1929年)の研究や顕彰活動を表彰する「モラエス賞」実行委員会から7月、特別賞の授賞が発表された。三好さんは徳島モラエス学会を主宰し、長年にわたってモラエスの文学作品などについて考察を重ねてきた。授賞式は今秋の予定。

### 新入会員

(敬称略、カッコ内は推薦人)

住友 武男 〒770-0006  
徳島市北矢三町4丁目9-13-7 (鈴木副会長)

### 訃報

美馬 清子さん(吉野川市山川町堤外1-94) 8月20日死去、享年90歳。平成15年第47回日本随筆家協会賞受賞、同年度徳島県特別出版文化賞受賞。著書に「蜩川」「母ゆずり」などがある。

※「編集後記」はお休みしました。